

運
動
教
育
雑
感



松本千代栄

最近の出版物には、“遊び”や“身体”を再認しようとする論が多くみうけられ、日本の中にも漸く身体文化の夜明けが近づきつつあるかと感じさせられる。

幼児の運動教育も、急速に多様化し、余暇の増加した母親と共に種々な形態で行なわれている。幼稚園における運動教育、——なかでも律動的な運動教育についても、百年の歴史を越えて根づいた伝統の深さゆえに、現代的な視点で再認されなければならぬときであるだろう。

運動パターンのドリル

幼児の運動教育の一つに、リズムカルな動きの上達をはかる場面をみうける。スキップやかけ足などのステップが行なわれたり、また、リトミックとして体系だったドリルが行なわれたりしている。リトミックは、Dalerze Eurythmicsとして、E・J・ダルクローズ(1865~1950)が、運動感覚とリズムとの有機的な

結合をはかり、リズム教育として開発したものである。園によっては、幼児の運動教育の主な内容の一つとなっていることは、種々の調査結果から明らかである。

実験的観察の一例をみてみよう。

三歳児、三十分の保育時間の中で、指示内容は直接、幼児の動きを指示し（音にあわせて手を叩く・歩く、音の高低にあわせて手の動作を行なう、音の強弱にあわせ動く、音符を言語化して動く、……など）幼児はそれに対してすばやく反応し、所与の動きを実現する。刺激―反応の一定のパターンがくりかえし行なわれ、反射的な行動として形成される仕組みになっている。たとえば、音符の長さどおり足をはこぶ運動パターンは、音刺激の正確な把握と敏速な反応が要求され、三歳児は、その急転換のスリルに興味づけられて、活気をもって行なっている。

四歳、五歳児については、リズムパターンが長くなる、音符を視聴覚上にとらえて反応するなど、複雑になり、反応の正確さを増すが、幼児の表情には生彩を欠くと観察者は認めている。

メトロノーム音を与えて大筋の律的調整（けんば、けんけんばなど）をみた結果でも、三歳児と四・五歳児との差は大きく、四歳を境とし、五歳児の運動に対する適応の幅は急速にひろがると認められている。

スキップのようにやや巧緻的な動きについても、四、五歳でできるようになる率が高い。

このような諸結果から、ただちに短絡的に結論づけられるものではないが、運動パターンのドリルの内容について、また、その方法について、現行の基礎的な運動教育に一つの問題点を提示していると考えられる。すなわち、単純な指示→同一反応というドリルの形態と内容が、幼児期すべての段階で等価値をもつとは認めにくく、その臨界点を考えて活用すべきであり、更に上位の内容と方法の階梯がほしいと思われる。

幼児期の運動教育の基礎となるものは何か——考えると問題は深くかくれているようである。

運動パターンの創造

幼児の運動教育の中で、もう一つの側面に、見たこと、感じたことを身体の動きでくふうし表現する活動がある。一般には自由表現とよばれている。（あまり賛成できない呼び名であるが——）

ここでは、直接的に運動を指示する形態ではなく、多くはイメージを与えて、動きを個々に選択させ発見させる方向がとられて

いる。戦後における、最も大きい転換の一つであった。最近行なわれた指導者養成校（大学・短大・専門学校）の指導者や保育者に対する調査⁽⁵⁾では、解答者の殆んどが自由な身体表現の指導を、授業内容の一位にあげており、その分野に対する価値意識を高くなっている。三十年の歩みである。

今日では、各地にすぐれた指導例もみられ、一つの指示から、多反応を予想し、更に、幼児自らが、連鎖的、飛躍的に発想し、自発的に表現をはこぶ契機を含んで行なわれる形態もかなり定着したかにみうけられる。

課題を与え、自らの動きを発見させる——ひきだし、保育は、運動パターンの探究のプロセスである。前述の、運動を操作する——（動きの姿勢、位置、パターンや熟練度を、感覚器官によって認識し識別し、正確に遂行する）活動に更に加えられる活動をもっている。すなわち、個々のユニークな発見・創造の過程であり、また、それを実現するための試行錯誤やコントロールの実践である。運動パターンは、幼児の内部過程で選択され、自身の身体⁽⁶⁾の動きによって外在化されているのである。

このようにみると、課題——発見の運動教育は、前者と等しく律的な基盤に立ちながら、そのプロセスにおいて異なった人格とのかかわり方をもち、人格を内包した運動として個々の出現を

はかっている独自の活動とみられるだろう。

しかし、創造的な教育が、高い価値を認められながら、方法上に困難を示すのは、運動教育においても例外ではない。前述の調査においても、指導方法に関する困難点が訴えられている。

隘路はどこにあるのであろうか。

その一つを、「イメージを運動化するためのみとおし力」とみるのはどうであらうか。創造の過程では、その準備の段階に、種々な情報があつめ、あたため、ひらめきのときを待つといわれる。幼児が運動パターンを創造しようとする場においても、イメージの多様な展開、運動パターンの多様な質的变化についての情報がのぞまれるだろう。

「蝶にならましよう」という課題の設定だけでなく、「身を急にひるがえす、大きい小さい、花上に呼吸をひそめる蝶」など、動きのイメージとむすびつく多様な情報を得て、「変身する蝶や複眼の蝶、美しく身軽い身のこなし」など、幼児は個々の視点をひらげ、内的なイメージと外的な運動イメージの像を融合させて、好みの運動パターンを発見し、表現を実現していくものではなからうか。

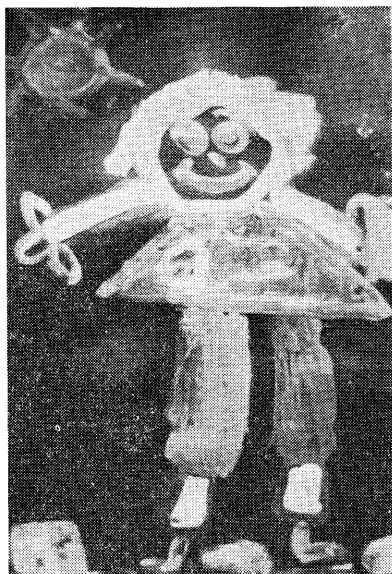
イメージと運動化、これに対する探求の手引は、運動教育にたずさわるものの、さしあたっての課題ではないだろうか。多様な

個性に応じる多様な道程をもちたいものである。

ドリルと創造をめぐる

眼を転じて他の運動教育をみてみよう。

創造的な運動教育を一貫して発展させている点で日本とイギリスは似ている。しかし、子細にみると、創造的な動きの発する源には距りがある。日本ではイメージから動きをひきだし、イギ



▲ F1

リスでは、運動の質的要因から動きをひきだす歴史をもつ。動きからイメージへの方向ともみられよう。エジンバラの友人、M・ウエプスター教授は、「日本の動きには心があるからいい」と評し、我々は、R・ラバンのシステムに発する、動きの創造を導く教育 (Art of Movement) に深い関心と敬意を払っている。

先年、訪れたクラスの活動をみてみよう。幼児の日常生活には、身体意識 (Body Awareness) と運動の原則にめざめさせ、自らくふうし、発見するように総合的な展開がみられる。新聞紙大の黒い用紙にポスターカラーで大胆に身体を描く四歳児たち (F1)、「坐る—身体を拡げる、空間にまろく—全身をつかって動く時々は後へ動く……」などとして描かれた身体運動の絵画や、粘土での造型 (F2・次頁参照) は、一方に運動への刺激であり、同時に、消えていく運動のフィードバック、その確かな定着への手引とみられた。運動の探求とその創造の遊びとして環境に自然にとけこんでいる。

運動パターンの指導には、教育当局の指導の手引にもみられるように、動きについて

- ①何を (身体意識、相手関係)
- ②いかに (動きの力—時間—流れ)
- ③どこへ (個人の空間、全体の空間)

を柱として手がかりが与えられる。

たとえば、「どんなに廻れるかしら」という動機づけから、子どもたちは、自転し、空間を移動し、さては跳びあがって廻るなど、動きを見出し、よりスムーズに行なわれるように挑戦する。

(F3)

示される要因は一つでありながら、同一化の方向へ動きを進めるのではなく、個々に発見し多様化する方向へ進められている。

また、動きは、抑制的な動きでなく、静止と運動を両極に拡大していくように、ダイナミックにはこぼれる。一人一人に限界への挑戦の楽しみを与え、力動的な動きによる解放感と満足、更に、友だちといっしょにくふうする楽しみが加わってくる。時々イメージへもつながる。詳述する紙数はないが、創造を内包したドリルとして、これらの運動の原則と展開は、我々のイメージの運動化にも多くの示唆をふくんでいると思われる。

運動パターンのドリルと創造——幼児の運動教育に始まり、舞踊文化につながる大きな課題に対する興味は尽きない。

(お茶の水女子大学)



▲ F2 4.5歳～6歳児の製作



▲ F3 6歳児 課題ターニング
一人一人がいきいきと、まわる動きを工夫する

注(1) 「幼児教育における身体表現活動についての一考察」永

井正子 お茶大修士論文'74(舞踊教育学専攻)

(2) 日本女子体育連盟紀要'75年

(3) 「情操と表現」 幼児教育学全集6 小学館

(4) 「幼児の運動能力の発達」 東京教育大学体育心理学研究

室

(5) 「動きのリズム指導の現状と問題点」 若松美恵子 舞踊

学会 昭53

(6) 「モダンダンスのシステム」 V・プレストン・松本訳

大修館書店

*
*
*